

自尊心概念及び自尊心尺度の再検討

東京大学教育心理学研究室 伊 藤 忠 弘

Reexamination of the concept and measurement of self-esteem

Tadahiro ITO

The purpose of this article is to review the studies on self-esteem during last 10 years in Japan and to examine the usefulness of the concept of self-esteem and the validity of the self-esteem scales.

It is shown that high self-esteem individuals are different from low self-esteem individuals in various social cognitions and behaviors in Japan as well as USA, but that the Rosenberg's self-esteem scale is not good enough for understanding "self-esteem" of Japanese people.

目 次

- I. 本論文の目的
- II. 自尊心尺度および自尊心概念に関する問題点
- III. 近年の自尊心に関する研究
 - A. 概 観
 - B. 他の尺度の収束的妥当性を確認した研究
 - C. 高自尊心者と低自尊心者の認知・行動の差異に関する実証的研究
 - D. 自尊心の規定因に関する研究
 - E. 自尊心の構造に関する研究
- IV. 結 論

I. 本論文の目的

自尊心 (self-esteem) に関してこれまで多くの研究がなされている。しかし、研究者によってその定義も、用いられている測定方法も必ずしも一致しているわけではない。そこで本論文では、自尊心尺度を用いた日本における最近の研究をレビューして、自尊心尺度の妥当性さらには自尊心概念の有効性を探る。

Markus & Kitayama (1991) は西洋と東洋の自己のあり方の差異に注目して、認知・情動・動機づけの各領域における対照的な研究結果を紹介した。認知や情動といった人間一般に普遍的と考えられる対象について文化差を考慮すべきという指摘に比べれば、人間の動機づけに関してその背景となる文化や社会を問題とすべきという主張はあまりにも当然であり、それゆえにその衝

撃は大きかったと考える。これまでの日本における社会心理学の研究が、欧米の理論を盲目的に導入し、それを追試するといった方法に傾倒しすぎたことに反省すべき点があろう。Markusらが主張するように、認知・情動・動機づけにおける文化的差異を包括的に説明する際の一つの切り口として自己のあり方を取り上げることが有効であるとすれば、欧米直輸入の自己に関する様々な動機概念や理論、そして自尊心概念について再検討を加えることは不可欠である。

そこで本論文では、特性としての「自尊心」に関する研究について、最近10年間の日本における研究を中心にレビューする。具体的には1985年以降の「心理学研究」、「教育心理学研究」、「実験社会心理学研究」、「社会心理学研究」の4つのジャーナルと、日本心理学会、教育心理学会、グループ・ダイナミックス学会、社会心理学会の大会発表論文集に掲載された論文から自尊心、自尊感情、ないし自己評価を問題としている研究を扱う。今回、学会発表の論文にも広くあたるのは、第一に自尊心に関する投稿論文の数が限られていること、第二に欧米と同様の結果が得られなかった研究は追試失敗として投稿されにくいことを考慮してのことである。なお、使用した尺度あるいは統計量について記載がない研究については引用を控えた。

II. 自尊心尺度および自尊心概念に関する問題点

自尊心の定義の仕方と自尊心の測定法は切り離すことができない。概念的にどのように詳細に記述したとして

も、実際に測定によって取り出すことができなければ、実証的研究にのせることはできない。また逆に、どんなに信頼性・妥当性の高い尺度であっても、概念に対する理論的背景が乏しければ研究の発展は望めない。

欧米では自尊心は対人認知あるいは社会的行動に広く影響を与える変数であることが実証されている。本論文では、日本における自尊心概念の有効性およびその測度の妥当性に関して、Markus & Kitayama (1991) を踏まえて以下の問題を設定する。

- (1) 自尊心尺度は日本においても何らかの認知的・行動的結果を予測しうるか？
- (2) もし予測するならば、それは欧米の結果と対応しているか？
- (3) 現在の尺度は「自尊心」の測定に妥当なものか？
- (4) 「自尊心」の概念は日本人においても有効か？

Ⅲ. 近年の自尊心に関する研究¹⁾

A. 概 観

自尊心を測定するための尺度として日本で頻繁に用いられているのは以下の2つである。

- (1) Rosenbergの自尊心尺度(星野, 1970; 山本・松井・山成, 1982)
 - (2) Janis & Fieldの不適切感の尺度(遠藤ら, 1974)
- 各尺度の特徴及び理論的背景については遠藤ら(1992)に詳しいが、敢えて言うならば、Rosenbergの自尊心尺度は彼のいうところの「非常によい(very good)」と「これでよい(good enough)」の2つの自尊感情のうち後者を扱うものとしている。また、Janis & Fieldの不適切感の尺度は、対人的な評価とそれに対する不安に関する項目が数多く含まれていることが特徴である。またRosenbergの自尊心尺度は10項目からなり、多くの研究で1因子性が確認されているが、Janis & Fieldの不適切感の尺度は複数の因子を仮定できることが示されている。本論文ではこの2つの自尊心尺度を用いている研究を中心に取り上げる。

この他にも、梶田(1988)の自己評価的意識インベントリーやFleming & Courtney(1984)の不全感尺度、根本(1972)の自尊心尺度が用いられている。また、井上(1986)は児童用の自尊心尺度を独自に作成している。さらに菅(1975)は自己概念に関する44の文章対(例えば、体格がよい—体格がよくない; 人のために尽くす—人のことはかまわない)について5あるいは7件法で回答させるという形式で自尊心を測定する尺度を開発している。

一方、自尊心尺度を用いた研究は以下の5つに大きく分けることができる。

- (1) 他の尺度の収束的妥当性を検討するために自尊心尺度を用いた研究
 - (2) 自尊心尺度により被験者を高自尊心者と低自尊心者に分けて、両群の認知・行動の差異を実験的に調べた研究
 - (3) 自尊心の規定因を調べた研究
 - (4) 自尊心尺度と他の尺度との関連あるいは自己意識に関する尺度の因子分析によってその構造を問題とした研究
 - (5) 実験的操作によって自尊心の変動を調べた研究
- このうち(5)の研究については、自尊心の測定ないし定義の問題と直接関わってくるものではないので、ここでは触れない。

B. 他の尺度の収束的妥当性を確認した研究

自尊心が自己の全体的な肯定的評価を反映しているという前提のもとづいて、新しい尺度の構成概念妥当性(収束的妥当性)を検討するために自尊心尺度との相関が調べられることがある。一般に、心理的な不適応・不健康を反映する指標とは負の相関が、心理的な健康さとは正の相関があることが予測される。例えば、対人不安(岡田・永井, 1989)、孤独感(工藤・西川, 1983; 諸井, 1985)、抑鬱(工藤, 1992)、シャイネス(相川, 1991)を測定する尺度とは一貫して負の相関が得られている。逆に認知されたコンピテンス(桜井・1983; 被験者は小学3年~中学3年)や人生に対する満足度(角野, 1994)とは正の相関が認められている。これらは概念的には当然の結果といえる。

そこで自尊心尺度によって測定される自尊心の特徴を明らかにするためには、心理的健康・不健康とは直接関連が予測しにくい尺度についての相関研究を考慮することが有効であろう。近年の研究では、ユニークネス(山岡, 1993a)、男性性(石田, 1993)、とは、3前後の正の相関が認められているが、女性性(石田, 1993)、私的・公的的自己意識(押見, 1992)、自己認識欲求(上瀬, 1992)、承認欲求(河本, 1990)とは無相関あるいは低い相関しか認められないことが明らかにされている。また、桜井(1992)はEPPSの親和欲求、達成欲求の項目を基にして構成した尺度とほとんど相関がないことを見いだしているが、有木ら(1988)は達成関連動機測定尺度との関連を調べ、高自尊心者は達成動機が高く、失敗不安、成功不安が低いという結果を得ており、一貫していない。

表 Rosenbergの自尊心尺度とパーソナリティ変数との相関

孤独感	-.42
抑鬱	-.69
人生の満足度	.59
ユニークネス	.33
男性性	.24 (.23)
私的自己意識	.01
公的自己意識	.09
自己認識欲求	.00
承認欲求	.09 (.26)

(注) 男性性、承認欲求に関しては、左が男性、右が女性

C. 高自尊心者と低自尊心者の認知・行動の差異に関する実証的研究

ここでは自尊心尺度を基にして弁別された高自尊心者と低自尊心者との間の認知・行動の差異を明らかにすることを目的とした実験についてレビューする。

原因帰属に関しては、鹿内 (1978) が独自の自尊心尺度を中学生に実施した後、アナグラム課題によって成功・失敗を操作してその帰属を調べている。その結果、全体としては自尊心の高さに関係なく、成功を外的要因に、失敗を内的要因に帰属するという反利己的帰属を明らかにした。しかし帰属因ごとの分析では、高自尊心者が成功を能力帰属するのに対して、低自尊心者は失敗を能力帰属するという交互作用が得られた。

森尾 (1993) は、自尊心の高低と公的自己意識の高低で被験者を4群に分け、失敗フィードバックに対する帰属を調べた。その結果、低自尊心者が高自尊心者に比べて能力不足に帰属し、運に帰属しないことを見いだした (同様の結果は鹿内の自尊心尺度を用いた吉田 (1993) でも認められている)。また竹下・佐久間 (1985) は、中学生に菅 (1975) の自己評価測定尺度を実施した後、仮想の成功・失敗場面についての帰属を尋ねた。失敗では差異が認められなかったが、成功場面では高自尊心者が低自尊心者に比べて能力と努力という内的要因に帰属することを見いだした。このように原因帰属を扱った研究では、効果はそれほど大きくないものの、高自尊心者が利己的帰属を示すことが一貫して示されており、欧米の知見とも一致する (Baumeister, 1993)。

人は自己評価を最大にするように、課題の「自我関与度 (relevance)」、他者との心理的「近さ (closeness)」、他者との相対的な「遂行 (performance)」を認知的・行動的に操作すると仮定した自己評価維持モデルを検証した研究では、桜井 (1992) が大学生に高校時代を想起

させて、低自尊心者が高自尊者よりも、自我関与の低い課題で友人の成績よりも自分の成績を低く評価するといった反映過程がより顕著に認められることを明らかにしている。磯崎・高橋 (1988) は小・中学生を対象に根本 (1972) の自尊心尺度を用いて、自己評価維持モデルに従った友人選択 (つまり自我関与の高い科目では成績が劣り、自我関与の低い科目で優れた友人を選択する傾向) が低自尊心者で認められることを見いだしている。

この他にも自己高揚動機に基づく行動の自尊心の高さによる差異を調べた研究がある。沼崎 (1991) は、低自尊心者が低能力の診断性が低い課題を選好する傾向を見だし、人が能力に関する正確な情報を求めることを前提とする自己査定理論の予測に従わないことを明らかにしている。セルフ・ハンディキャッピングに関しては、伊藤 (1992a) は高自尊心者が努力差し控え方略を採用することを見いだしているが、セルフ・ハンディキャッピングの方略自体の質が自尊心の高低によって異なり、低自尊心者は身体的不調や不安といった要因をセルフ・ハンディキャッピングとして採用する可能性を示唆する研究 (伊藤, 1992b; 鹿角, 1994) もある。

社会的比較に関しては、吉川・久保 (1989) が男子大学生に九大版自尊心尺度を用いて、低自尊心者が高自尊心者に比べて、知的課題遂行後に他者の成績を知りたいという欲求が強く、また課題自体を重要であると認知しているという結果を見いだしている。吉川らは、高自尊心者はすでに自らの能力に対して高く安定した評価を持っているので、比較を行ったり自己高揚を行ったりする必要がないと考察している。

集団との関係に関わる行動に関して、黒沢 (1992) は独自の自尊心尺度を用いて大学生を弁別し、高自尊心者は低自尊心者に比べて、特に集団圧力の強い場合でも同調を示さないことを明らかにしている。一方、波岡 (1993) は中学生を対象に内集団・外集団の意志決定の質の評価を尋ねるという手続きによって、高自尊心者が内集団バイアスを示すことを明らかにしている。

対人認知においては、蘭 (1990) はその著者の中で「パーソン・ポジティヴィティ」という概念を提起している。「パーソン・ポジティヴィティ」とは、「他者を好意的にそして肯定的に認知する傾向」であり、彼はこの傾向が高自尊心者において大きいと仮定した。そして、蘭 (1992) は教職経験のある大学院生を対象に仮想場面における「好かれる子」、「いじめっ子」に対する認知を調べ、低自尊心者は「いじめっ子」への認知が低いことを明らかにしている。高自尊心者が「パーソン・ポジティヴィティ」を示すことを支持する結果は、大坊 (1993)

によっても得られている。

自己開示における自尊心の影響は、ほとんど認められない(渡邊, 1994)か、あるいは非常に限定された開示内容に限られている(遠藤, 1989; 片山, 1991)。現時点では自尊心が自己開示に影響を及ぼしているとはいえない。

この他には、対人魅力(松井・山本, 1985)、被援助者の反応(西川・高木, 1990)、教師のフィードバックの影響(樽木, 1992)、反事実的思考(工藤, 1990)などについて自尊心の高低による差異が調べられている。

ここで取り上げられた行動の多くは、自尊心を維持・高揚させる行動として整理することができる。欧米の研究では、自尊心の高さと自己防衛ないし自己高揚の動機や行動との関係については結果が混乱している(Baumeister, 1993)。このことは、今回レビューされた日本の研究についても当てはまる。高自尊心者が利己的帰属を示し、セルフ・ハンディキャッピングを採用し、内集団バイアスを示す一方で、低自尊心者は自己評価維持モデルに従い、低能力が明らかになることを避けようとし、集団圧力に対して同調しやすいとされている。自己防衛ないし高揚動機に基づく方略の差異を説明するための包括的な枠組みを構築するために、個々の領域における研究の蓄積が不可欠であろう。

被験者を尺度上の得点で二群に分割する際に留意しなければならないのは、研究者が対象となる行動と自尊心の間に直接的な関係を想定しているかどうかである。自尊心尺度の得点分布が正規分布するとすれば、高自尊心者と低自尊心者が質的に異なると積極的に主張する根拠はない。よって、直線的な関係を想定しつつ、便宜上二群に分割するのであれば、その前提を支える証左で補うことが必要であろう(例えば、自尊心が中程度の被験者が高自尊心者と低自尊心者の間に位置することを確かめたり、質問紙による相関研究により直線関係を確認する)。またどのような基準で二群に分割するかにも注意しなければならない。かなり得点の極端な被験者を採用すれば統計的な有意差が見いだされやすいが、その結果をもって全ての被験者に対する自尊心の全般的な影響を議論することには慎重にならなければならない。

D. 自尊心の規定因に関する研究

1. 理想自己と現実自己のずれと自尊心

理想自己と現実自己のずれが心理的不適応と関連しているという考え方に従えば、自尊心の規定因として理想自己-現実自己のずれを問題にすることができる。岡田(1987)は中学・高校・大学の男子学生を対象にSelf

Differential尺度を実施し、理想自己-現実自己のずれと自尊心との相関を調べた。その結果、中学($r = -.13$)から高校($r = -.33$)、大学($r = -.56$)へと進むにつれて負の相関が大きくなることを見だし、理想自己が自己評価の基準たりえるようになるのは年齢が上がってからであると結論づけている。一方、遠藤由美は、理想自己を正の理想自己と負の理想自己の2つに区別している点が注目される(例えば、遠藤, 1992)。正の理想自己とは自分のなりたいたいと思っている自分、いわゆる従来の理想自己であるのに対して、負の理想自己とは自分が決してなりたくないと思っている自分、かくありたくない自分を指している。大学生を対象とした調査の結果、自尊心は正の理想自己と現実自己のずれよりも、むしろ負の理想自己と現実自己のずれによって規定されている部分が多いことを見いだした。つまり、なりたくないと思っている自分に近づかないことが重要であることを意味している。遠藤は、集団規範からの逸脱を気にし、「他者から後ろ指をさされぬように」行動する日本人一般の特徴と一致する結果として解釈している。

理想自己と現実自己のずれが小さい方が自尊心が高いという考え方は、先に述べた「これでよい」とするいわゆる自己受容が自尊心を規定するという主張と一致する。これは本来、Rosenbergが測定しようとした自尊心であり、自尊心尺度との相関が高くなることもうなづける。ただし、自尊心を自分自身に対する積極的な態度として捉えるならば、適度に高い理想を保持していることは必ずしも不適応的であるとはいえない。また測定の仕方によっては、現実自己の高さと理想-現実のずれが交絡していることがあるかもしれない。すなわち、理想自己の高さが一定に高いとするならば、現実自己の高さと理想-現実のずれは逆相関するからである。理想と現実のずれが、単なる現実自己の肯定さよりも、自尊心や他の心理的適応の指標に対して説明力が高いかどうか、明確にしておく必要がある。そうでなければ、理想-現実のずれを質問紙によって測定することにはあまり意味はなく、むしろ個々のケースを記述的に扱う方が意味があると思われるからである。

2. 自己の二側面と自尊心の関係

先に述べたMarkus & Kitayama(1991)は西洋と東洋における自己のあり方の差異について指摘しているが、これと類似した観点から自己の二側面に注目して全体的な自尊心との関係を調べる研究がある。伊藤美奈子は、社会化と個人化という人間の2つの発達の過程に注目して、社会志向性・個人志向性を測定する尺度を開発している(例えば、伊藤, 1993)。社会志向性とは、終

局に社会適応・文化適応を置く、他者あるいは社会の規範に則った生き方の志向性であり、個人志向性とは、終局に自己現実を置く、個性を活かした生き方への志向性と定義される。伊藤（1993）は青年期から成人期までを広く対象にした発達的研究のなかで、重回帰分析の結果、自尊心の高さを説明する際に、男女とも一貫して社会志向性よりもむしろ個人志向性の影響力が強いことを明らかにしている。

山本（1989）は、人間が固有の世界を持つ個的存在であると同時に他者との関わりのなかで生きる集団的存在であることに注目して、自己の二面性として“connected self”と“separated self”を挙げている。彼女はこの2つの側面の強さを測定する尺度を構成し、梶田（1988）に基づく自尊心尺度との関連を調べている。発達差が認められたものの、全体としてみると両側面とも自尊心と正の相関があり、特に“separated self”の側面の方が相関が高かった。また自尊心を目的変数とする重回帰分析の結果も、“separated self”の影響力が強いことを明らかにしており、この傾向は特に女性で顕著であった。

いずれの結果も自己の個人的・個別的側面と自尊心の関連が強いことを示唆している。この結果は、自尊心尺度で測定されているものが何であるかという問題を抜きにしては考えられない。Rosenbergの自尊心尺度の項目を見る限り、他者と比較した自己についての言及はあるものの、自己と他者あるいは社会との関係のあり方について言及した項目はない。自尊心は全体的な自己評価を反映するものなので、自己に対する抽象的な項目が並ぶことはやむを得ない。これに対して、自己をいくつかの側面に分離するという考え方はかなり一般的である。例えば、Greenwald & Pratkanis（1984）は拡散的（diffuse）・私的（private）・公的（public）・集合的（collective）の下位自己（sub-selves）が別個に自己評価の基盤を与えると主張している。しかし、全体的な自尊心の測度は、自己の個人的・個別的側面、あるいは私的側面を主に反映した項目となっている。よって、自己の各側面を分離してそれぞれが自尊心に影響を与える、あるいはその個人差を考慮するという考え方が妥当なものであったとしても、相関研究でこのような自尊心尺度を用いる限り、社会的側面や公的あるいは集合的側面の影響は過小評価されることが予想される。これに関連して、Luhtanen & Crocker（1992）は集合的自尊心という概念を提起し、尺度を構成している（翻訳は、山岡，1993b）。

3. 個別領域における自己評価と全体的な自尊心の関係

全体的な自己の評価ともいうべき自尊心と、各領域（例えば、知性、スポーツ、容姿など）における個々の自己評価との相関を調べた研究としては、山本・松井・山成（1982）が知られている。彼らは、大学生に「自分の自信のあるところ」を面接によって尋ね、それによって収集した78の質問項目を因子分析にかけて11の因子を抽出した。そしてこの11領域の自己評価と自尊心の関連を調べた。自尊心得点を目的変数、各領域の自己評価得点を説明変数として重回帰分析を行い、男性では「生き方」、「知性」、「容姿」、「社交」、女性では「優しさ」、「容姿」、「経済力」、「生き方」が自尊心を説明する変数として影響力が大きいことを見いだした。

同様に森上・廣田（1993）は各領域の自己評価と自尊心の間に.2～.4程度の相関を見だし、「感情の安定性」、「人づきあいのうまさ」、「運動能力」、「知的能力」の自尊心への影響が大きいことを明らかにしている。笹山（1994）は、自尊心を目的変数、各領域の自己評価と他者評価（他者からみたその人物の評価）のずれを説明変数として重回帰分析を行い、分析を行った7つの領域全てについて標準偏回帰係数が有意となることを明らかにした。すなわち、各領域で自己を過大評価している者ほど自尊心が高いということになる。

これらの研究では、各領域の自己評価間の相関が問題となる。伊藤（1994）は山本ら（1982）に基づいた各領域の自己評価得点を因子分析した結果、一因子性が高く、各領域間の相関が高いことを明らかにしている。もし各領域の自己評価間の相関が非常に高ければ、そのような複数の自己評価得点を説明変数として重回帰分析を行うことは多重共線性の問題を伴い、結果をそのまま信頼することはできない。また各領域の自己評価の相関が高い場合には、それらを統合する上位概念として自尊心が重要であることを示唆していると解釈できる。つまり「スポーツ能力」と「優しさ」あるいは「知性」と「容姿」など本来相関を仮定することが困難な関係において高い相関が認められるならば、各領域の自己評価が自尊心を決定するという図式よりも、むしろ全体的な自尊心の高さが各領域の自己評価に影響を与えるという逆の図式の方が結果の説明として妥当であろう。その場合には、各領域の自己評価の関数としての自尊心ではなく、別個に全体的な自尊心を仮定し測定することに意味があることを示す傍証と見なすことができるだろう。

4. 心理的適応の指標としての自尊心

先に述べたように、自尊心は心理的健康の1つの指標

として採用されている。河合千恵子と下仲順子は、老人のquality of lifeを幸福感情と自己に対する受容感からなるとし、自己に対する受容感の指標としてRosenbergの自尊心尺度を用いて、老人の適応に影響を与える要因を探っている(河合・下仲(1988)など)。同様に中里克治らも60歳以上の老人を対象に調査を行い、依存性が自己評価を低めていることを明らかにしている(例えば、中里ら, 1993)。

この他には学校生活における適応や仲間志向性(例えば、久世ら, 1985)や身体満足度(例えば、柴田・野辺地, 1990)が自尊心と関連していることが示されている。

5. 両親の養育態度が自尊心に及ぼす影響

自尊心が行動・認知に影響を及ぼすとすれば、自尊心の形成が焦点となる。徳田(1987)は高校生を対象にJanis & Fieldの自尊心尺度と親子関係診断尺度(EICA)を用いて、両親の養育態度との関連を調べたが、明確に関連がある指標(EICAの下位尺度)をほとんど見いだせなかった。一方、森下(1990)は小学生・中学生・大学生を対象に、独自に構成した自己受容に関する質問紙とEICAの「情緒的支持」と「統制」の相関を調べ、両親の情緒的支持の肯定的な影響、統制の否定的な影響を示唆する結果を得ており、結果は一貫していない。また高木・藤田(1988)は大学生に「親からの影響や親への意識」を質問紙によって尋ね、Janis & Fieldの自尊心尺度との関係において性差を見いだしている。

なお教室場面での自尊心の育成については遠藤ら(1992)に詳しい。

E. 自尊心の構造に関する研究

日本労働研究機構による「パーソナリティ・テストに関する基礎的研究」(日本グループ・ダイナミックス学会第41回大会発表論文集(1993)に一部報告)は既存のパーソナリティ尺度の関連と位置づけを明らかにするために、1,000人以上の大学生を対象に14の尺度を実施した。その中には自尊感情に関わる尺度として、Rosenbergの自尊心尺度とFleming & Courtneyの自己不全感尺度が含まれている。各尺度ごとに因子分析を行い、39の下位尺度得点について再度因子分析を行った。その結果7つの因子が抽出され、その第一因子として、Rosenbergの自尊心尺度、Fleming & Courtneyの自己不全感尺度の下位6尺度、さらに楽観主義尺度が含まれ、「自己不全感」と命名されている(この他に「社会的受容・承認を求める傾向」、「人間不信・アパシー」、「対人不安」、「道義性の判断」、「自己表出」、「自己意識」の因子が抽出されている)。他の尺度とは別個に自尊心に関連する

2つの尺度が1つの因子を形成したことは、自尊心概念の独立性を示唆するものと解釈できる。またこの結果では、Rosenbergの尺度と同様に、自己の肯定的な認知・感情と否定的な認知・感情がそれぞれの対極に位置するものとして1つの因子を構成しており、肯定的認知・感情と否定的認知・感情を独立したものと捉える研究結果(例えば、遠藤ら, 1992; 内田, 1990)とは異なる。

一方、自尊心がその中に質的に異なる要素を含んでいると考える見方もある。

例えば、梶田(1988)は自己評価的な意識や態度を4つの側面に分類している。

- (1) 基盤となる感情や感覚(自尊心, 誇り, 自己愛など)
- (2) 比較対照による感覚や意識(優越感, 劣等感など)
- (3) 自分の要求水準や理想自己に照らしての感覚や意識(自己受容, 自己満足など)
- (4) 外的現れとしての態度や行動特性(積極性, 自律性など)

梶田は、自分の作成した自己評価的意識インベントリーについて因子分析を行い、男女で含まれる項目が若干異なるものの、「自信」、「優越感」、「自己受容」、「自己防衛」、「自己への素直さ」の5つの因子を抽出している。同じ尺度を用いた他の研究では必ずしもこのような因子を確認していない(長谷川, 1991; 山田, 1994)。例えば梶原(1992)は、「優越感」、「自己嫌悪」、「他者のまなざし」の3因子を抽出している。しかしどの研究結果も基本的には先の4つの側面に対応している。全体としては、「誇り, 自信」、「自己受容」、「優越感」の三者はそれぞれ内容的に別個のものとして因子を形成するといえる(蘭(1986)も同様の分類)。ただし、それぞれの因子得点間の相関については明らかではなく、相互の関係や自尊心としての全体的な構造については定かではない。

この他にも自己愛(例えば、大石・福田・篠置, 1987)や自己受容(例えば、沢崎・佐藤, 1984)など自尊心と関連すると予想される概念について、それらを測定する尺度が個別に開発されているが、妥当性の検討に乏しく、自尊心尺度との関連も調べられていない。

IV. 結 論

ここまでにレビューした研究を基にして、IIで述べた4つの問題点について考察する。

(1)の問題については、IIIのBとCでレビューした研究によれば、高自尊心者と低自尊心者では認知や行動が異なることが明らかにされている。自尊心は様々な心理的

不適応と関わる尺度と一貫した負の結果を得ているし、また一部を除いて様々な社会的な認知ないし行動でその影響が認められた。ただし、いくつかの研究においてはその差異は必ずしも大きくなく、傾向差にとどまっているものも見受けられた。

(2)の問題については、効果の方向に関して、心理的不適応と関わる尺度との相関や、利己的帰属やセルフ・ハンディキャッピングなどの研究が示す限りにおいて欧米の研究と一致しているが、先に述べたように、自尊心の影響が欧米に比べて小さいという可能性も否定できない。また今回は個々の研究において厳密に欧米の結果との比較を行っていないため、全ての領域において一致しているかどうかは定かではない。現に押見(1992)は、欧米では自尊心尺度と自己意識尺度の間に弱い負の相関が認められていることを挙げ、日本の結果との違いを指摘している。

さらに、原因帰属の研究で報告されたように、自尊心の差異による相対的な差とは別に、全体的な傾向が欧米とは異なる可能性も示唆される。例えば、伊藤(1994)は、高自尊心者と低自尊心者に山本ら(1982)に基づく11の領域において自分と、自分と同性かつ同年齢の平均的な他者に対する評価を尋ねた。欧米では高自尊心者が他者よりも自分を非常に肯定的に記述することが知られているが、この研究ではそのような傾向は認められず、低自尊心者が他者よりも自分を否定的に記述するという自己卑下傾向が認められた。すなわち、相対的には欧米と同様の自尊心の影響が認められるとしても、絶対的なレベルにおいて異なっている可能性があり、結果の解釈に注意する必要がある。

(3)と(4)の問題、すなわち概念的定義と測定の問題は明確に切り離すことはできない。尺度の妥当性でまず問題になるのは、質問紙による測定に伴う限界である。井上(1986)は以下の3つの点を問題として挙げている。第一に「否認」や「劣等感の補償」といった防衛機制による高得点の混入を避けることが不可能であること、第二に妥当に高い要求水準による「建設的」低得点を弁別できないこと、第三に被験者が児童の場合、未熟な自己認識による評定だけを自尊心の指標とするのは危険だということである。井上(1986)は小学生5年生を対象に、児童用自尊心尺度の回答と教師の評定による自尊行動の評定によって被験者を群分けし、ソシオメトリック地位や失敗課題に対する構えや不安、ロールシャッハテストの結果等を比較している。その結果、学業成績やソシオメトリック地位についてはむしろ教師評定と対応する結果となっていた。そして井上は、高自己評定-低教師評

定の児童は、低い達成や地位を認めきれずに「妥当性のない自信」で他者評価に抵抗している者、一方、低自己評定-高教師評定の児童は、要求水準が高く、他者との比較に関してより敏感であるために現状に満足しきれない者と結論づけている。また河本(1990)も、自己の価値を対人的、社会的に維持し高めようとする構え(俗に「プライドが高いため」と称されるような行動)を測定するための尺度を独自に構成して、自尊心尺度と正の相関を見だし、従来の自尊心尺度は状態的自尊心と積極的な自尊的構えの双方を不分離に含んでいると主張している。

井上の研究では、児童による自己評定と教師による評定の相関がどの程度であったか、についての記載はなく、ごく一部の特定の児童のみを取り上げて比較している。このため、自他の認知のずれが広く認められるものか、実際には相関がかなり高いのかについて明らかでない。ⅢのCで触れたような自尊心を維持・高揚させる様々な方略を対象とする研究においては、現在の自尊心尺度が防衛的反応によってどの程度歪められているか、いわゆる防衛的な高自尊心者がどの程度混在するものなのか、は大きな問題である。

従来の自尊心尺度が測定している「自尊心」が何であるのかという問題について、ⅢのDにおける自己の二面性と自尊心の関連を扱った研究はいずれも、Rosenbergの自尊心尺度で測定される自尊心が自己の個人的・個別的側面と自尊心の関連が強いことを示唆している。同様に性差に焦点を当ててみると、石田(1990)が明らかにしているように、男性性は自尊心と相関があるが、女性性は無相関であった。またいくつかの研究では、自尊心得点が女性よりも男性において高いことが明らかにされている(例えば、桜井, 1992)。しかしだからといって、性別に関わらず男性性が心理的健康につながるとか、男性は女性よりも心理的に適応していると短絡的に結論づけることはできない。Markus & Kitayama(1990)が述べているように日本における自己のあり方が相互依存であるならば、むしろ他者や所属集団との関係の方が全体的な自尊心を支える基盤としては重要かもしれない。このことは女性の自尊心を考える場合にも同様に当てはまる。しかし、現在の尺度は、全体的な自尊心というよりも私的な自己の評価をより反映した測度となっている可能性がある。よって、いわゆる「自尊心」を測定しているとはいえないかもしれない。

一方、ⅢのDの個別領域における自己評価と全体的な自尊心の関係を調べた研究は、全体的な自尊心概念の有効性について支持を与えてくれる。仮に一見関連が予想

されない各領域の自己評価間の相関が高い場合には、それぞれが自尊心を媒介として結びついていることが予想される。このことは、自尊心の影響を除いた偏相関の値を調べることによって明らかになる。もしそうだとすると、様々な個別の自己評価に影響を与える要因として全体的な自尊心を問題にすることはそれなりに意味があるということになる。個々の行動領域の予測に関しては、例えば自己効力感 (self-efficacy) のようなその領域に固有な指標の方が予測性が高いのは当然といえる。これは心理的適応の指標についても同様である。自尊心という概念が有効であるとすれば、これらを統合する包括的な概念としてである。

上の2つと共に、自尊心の構造について概念整理も必要であろう。ⅢのEで述べたように、いわゆる「自尊心」のなかには、少なくとも「誇り、自信」、「自己受容」、「優越感」の質的に異なる要素が含まれていることが指摘された。個々の要素が対人認知や社会的行動、あるいは心理的健康に対して別々に異なる影響を与えることが実証されるならば、これらを明らかに分離できるような新しい尺度を開発することが必要となる。この点に関しては、さらに概念間の相互関係を明らかにする研究が望まれる。

「自尊心」は、その有効性がその全体性・包括性にあるならば、「自己についての全般的な感情、評価、ないし態度」と定義できるだろう。これをさらに分析的に考えるなら、以下の観点から捉えることができる。

- (1) 肯定的評価と否定的評価の関数として捉える
- (2) 大きく分ければ私的・個別的側面と公的・社会的側面をその基盤として持つ
- (3) 形成過程を考慮すれば、「誇り」、「自己受容」、「優越感」という構造を持つ

これまでの研究から、現在の自尊心尺度は、高自尊心者と低自尊心者の認知や行動の差異を明らかにしており、その意味での妥当性は確認されているといえよう。ただし現在の測度は、肯定的評価と否定的評価を一次的に捉え、主に私的・個別的側面を基盤とする「自己受容」的評価を測定している。さらにその中には防衛的な要因が不可分に含まれている。よって、研究の目的如何によっては異なる観点から自尊心を概念化する尺度を構成することも必要となるかもしれない。

(指導教官 市川伸一)

注

- 1) 以下、特に言及がない場合には、被験者として大学生、自尊心尺度としてRosenbergの自尊心尺度を用いた研究である。

引用文献

- 相川充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62, 149-155.
- 蘭千壽 1986 対人魅力 対人行動学会(編) 対人行動の心理学 誠信書房
- 蘭千壽 1990 パーソン・ポジティヴィティの社会心理学 北大路書房
- 蘭千壽 1992 パーソン・ポジティヴィティの基礎的研究(1) 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 266.
- 有木香織・福田敏隆・中島弘徳 1988 達成動機に関する研究(2) 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 506-507.
- Baumeister, R.F. (Ed.) 1993 Self-esteem: The puzzle of low self-regard. New York: Plenum Press.
- 大坊郁夫 1993 容貌の魅力認知における個人情報役割 日本グループ・ダイナミクス学会第41回大会発表論文集, 102-103.
- 遠藤公久 1989 開示状況における開示意向と開示規範からのズレ性格特徴との関連— 教育心理学研究, 37, 20-28.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽(編) 1992 セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-esteemの研究 九州大学教育学部心理学部門紀要, 18, 53-65.
- 遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, 63, 214-217.
- Fleming, J., & Courtney, B.E. 1984 The dimensionality of self-esteem: II. Hierarchical facet model for revised measurement scales. Journal of Personality and Social Psychology, 46, 404-421.
- Greenwald, A.G., & Pratkanis, A.R. 1984 The self. In R.S. Wyer & T.K. Srull (Eds.), Handbook of social cognition, Vol.3, Hillsdale, New Jersey, Lawrence Erlbaum.
- 長谷川博一 1991 自己評価の意識からみた心理的健康—他の尺度との関連— 日本心理学会第55回大会発表論文集, 608.
- 星野命 1970 感情の心理と教育 児童心理, 24, 1445-1477.
- 井上信子 1986 児童の自尊心と失敗課題の対処との関連 教育心理学研究, 34, 10-19.
- 石田英子 1993 ジェンダ・スキーマの認知相関指標における妥当性の検証 心理学研究, 64, 417-425.
- 磯崎三喜年・高橋超 1988 友人選択と学業成績における自己評価維持機制 心理学研究, 59, 113-119.
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性と社会志向性に関する発達の研究 教育心理学研究, 41, 293-301.
- 伊藤忠弘 1992a 自尊心がセルフ・ハンディキャッピングに及ぼす影響(1)—努力の差し控え方略— 日本心理学会第56回大会発表論文集, 124.
- 伊藤忠弘 1992b セルフ・ハンディキャッピング尺度の因子構造 日本社会心理学会第33回大会発表論文集, 158-159.
- 伊藤忠弘 1994 自尊心と個別領域における自己評価及び他者への評価との関係 日本心理学会第58回大会発表論文集, 941.
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学 第二版 東京大学出版会
- 梶原佳子 1992 女子短大生の自己評価の意識の内的構造に関する一考察 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 208.
- 上瀬由美子 1992 自己認識欲求の構造と機能に関する研究—女子

- 青年を対象として— 心理学研究, 63, 30-37.
- 鹿角浩美 1994 課題遂行におけるセルフ・ハンディキャップ—自尊心感情維持機能の検討— 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 205.
- 片山美由紀 1991 自尊心が自己のネガティブな側面の開示に及ぼす影響について 日本社会心理学会第32回大会発表論文集, 226-229.
- 河合千恵子・下仲順子 1988 老人のQuality of lifeと家族関係に関する研究 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 108-109.
- 河本いずみ 1990 自尊感情概念の再検討 日本社会心理学会第31回大会発表論文集, 20-21.
- 工藤恵理子 1990 目標達成の正否および「惜しさ」が情緒反応と反事実的思考に与える影響について 日本グループ・ダイナミクス学会第38回大会発表論文集, 65-66.
- 工藤恵理子 1992 課題の成功の予期における抑鬱的な人と非抑鬱的な人の違いについて 日本グループ・ダイナミクス学会第40回大会発表論文集, 101-102.
- 工藤力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(1) —孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討— 実験社会心理学研究, 22, 99-108.
- 黒沢香 1992 多数派への同調に対する自己意識と自尊心の影響 心理学研究, 63, 379-387.
- 久世敏雄・二宮克美・大野久 1985 中学生・高校生の学校生活への適応に関する一研究 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 404-405.
- Luhtanen, R., & Crocker, J. 1992 A collective self-esteem scale : Self-evaluation of one's social identity. Personality and Social Psychological Bulletin, 18, 302-318.
- Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, 224-253.
- 松井豊・山本真理子 1985 異性交際の対象選択に及ぼす外見的印象と自己評価の影響 社会心理学研究, 1, 9-14.
- 森下幸夫・廣田君美 1993 自己属性評価と自尊心の検討 日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 232-233.
- 森尾博昭 1993 失敗の原因帰属における自尊心および公的自己意識の影響 日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 82-83.
- 森下正康 1990 親の養育態度と子どもの自己受容の発達 日本教育心理学会第32回総会発表論文集, 157.
- 諸井克秀 高校生における孤独感と自己意識 1985 心理学研究, 56, 237-240.
- 中里克治・下仲順子・河合千恵子・長田由紀子 1993 老年期における依存性に関する心理学的研究(2)—依存性と自律の適応に及ぼす影響— 日本心理学会第57回大会発表論文集, 578.
- 波岡孝子 1993 自尊心が集団評価に及ぼす影響について—中学生を対象として— 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 147.
- 根本橋夫 1972 対人認知に及ぼすSelf-Esteemの影響(I) 実験社会心理学研究, 12, 68-77.
- 西川正之・高木修 1990 援助がもたらす自尊心への脅威が被援助者の反応に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 30, 123-132.
- 沼崎誠 1991 自己能力診断が可能な課題の選好を規定する要因—自己査定動機・自己高揚動機の個人差と性差— 心理学研究, 62, 16-23.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 ナルシズム的人格の基礎的研究(1)—ナルシズム的人格目録の信頼性と妥当性について— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.
- 岡田努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116-121.
- 岡田努・永井徹 1989 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連 心理学研究, 60, 386-389.
- 押見輝男 1992 自分を見つめる自分 自己フォーカスの社会心理学 サイエンス社
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成 教育心理学研究, 31, 60-64.
- 桜井茂男 1992 自己評価維持モデルに及ぼす個人差要因の影響 心理学研究, 63, 16-22.
- 笹山郁男 1994 自己認知像と他者認知像との間に生じるズレと関連する性格特性の検討 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 322-323.
- 沢崎達夫・佐藤純子 1984 大学生の自己受容測定尺度作成の試み 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 366-367.
- 柴田利男・野辺地正之 1990 青年期における身体満足度と自尊感情の関連性 日本心理学会第54回大会発表論文集, 68.
- 鹿内啓子 1978 成功・失敗の帰因作用に及ぼすself-esteemの影響 実験社会心理学研究, 18, 35-46.
- 菅佐和子 1975 Self-Esteemと対他者関係に関する一研究—青年期を対象として— 教育心理学研究, 23, 224-229.
- 角野善司 1994 人生に対する満足尺度 (the Satisfaction With Life Scale [SWLS]) 日本語版作成の試み 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 192.
- 高木秀明・藤田仁美 1988 親子関係と青年の自己意識—自我同一性, 自尊感情との関連— 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 360-361.
- 竹下由紀子・佐久間誠一 1985 達成動機および自己評価と原因帰属との関係 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 468-469.
- 樽木靖夫 1992 中学生の自己評価に及ぼす担任教師によるフィードバックの効果, 40, 130-137.
- 徳田完二 1987 青年期における自己評価と両親の養育態度 心理学研究, 58, 8-13.
- 内田圭子 1990 青年の生活感情に関する一研究 教育心理学研究, 38, 117-125.
- 渡邊暁子 1994 悩みの開示の規定因について—パーソナリティとの関連— 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 323.
- 山田紅美 1994 「自分」の二面的な意識に関する研究 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 224.
- 山岡重行 1993a ユニークネス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 社会心理学研究, 9, 181-194.
- 山岡重行 1993b 集合的自己高揚尺度の作成と検討 日本グループ・ダイナミクス学会第41回大会発表論文集, 84-85.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究—青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討— 教育心理学研究, 37, 302-311.
- 吉田俊和 1993 自己評価が原因帰属と課題遂行に及ぼす効果 日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 240-241.
- 吉川肇子・久保真人 1989 課題の重要性が比較過程に及ぼす効果(2) 日本グループ・ダイナミクス学会第37回大会発表論文集, 29-30.